



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	[展示]沿革展示室第一期展示「初期の札幌農学校」
Citation	北海道大学大学文書館年報, 12, 68-88
Issue Date	2017-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65774
Type	other
File Information	ARHUA_12_005_p68-88.pdf



< 展 示 >

沿革展示室第一期展示「初期の札幌農学校」

1. 沿革展示室について

沿革展示室（大学文書館1階）では、基本的に大学文書館が所蔵する原資料を陳列展示している。資料の安全や保護のため通常は施錠閉室し、観覧希望者がある場合、来賓が来館する場合、大学祭・ホームカミングデーなどの行事の際などに開室し、大学文書館員が展示解説を行なっている。2016年6月から「初期の札幌農学校」をテーマに第1期展示を実施しているが、今後、定期的に展示入れ替えを行なう予定である。

2. 第1期展示「初期の札幌農学校」解説

I. W. S. クラークと札幌農学校開校

1876年8月14日、札幌農学校はマサチューセッツ農科大学長ウィリアム・スミス・クラーク（1826-1886年）を教頭に迎えて開校した（陳列資料No I-1）。クラークは開校式演説で第1期入学生に対し“Lofty Ambition”（高邁な志）という語を用いて向上心に満ちた挑戦を促した。開校式後、札幌農学校はこのときのクラークの英語演説の日本語翻訳文を第1期入学生に提出させたらしく、現在、6点の翻訳文を所蔵している。中でも佐藤昌介（1856-1939年）の翻訳文（No I-2）は、荒川重秀（1859-1931年）の翻訳文と共に情報量の多い充実した内容である。

植物学を専門としたクラークは第1期生に植物組織学と植物生理学を講義した（No I-3）。また、課外に聖書講読も行なった。当時、官立学校で外国人が聖書を講じることは極めて異例であった。クラークは第1期生ひとりひとりに自筆で名前を書き込んだ聖書を与えている。現在、佐藤昌介と黒岩四方之進（1856-1929年）旧蔵の聖書を大学文書館で所蔵している（No I-4）。佐藤の聖書には「Sato Syoshiki」とクラークが名前を書き込んでおり、旧盛岡藩出身の佐藤の南部訛りを反映したローマ字表記となっている。

1877年4月16日、クラークは札幌農学校を離任した。その際、第1期生は島松駅通所（現在の北広島市島松）まで見送った（No I-5）。別れの地島松において、クラークは教え子たちへ“Boys, be ambitious”の言葉を贈ったという（No I-6）。クラークの札幌農学校在任は8ヶ月という短期間であったが、カリキュラム編成・附属農場設置・図書館整備などの学校運営面に加え、学生の信条にも大きな影響を及ぼした。

クラークの離任から2年後の1879年、同志社創立者新島襄（1843-1890年）がアメリカでクラークに面会したことを第1期生内田澁（1858-1933年）に宛てた書簡で伝えている

(No I - 7)。クラークは近々日本へ行く予定だと言っていたという。帰国後のクラークは不遇であり、再来日も果たすことはできなかった。

Ⅱ. W. S. クラークの教え子、第1期生

クラークの直接の教え子は第1期生のみであった (No II - 7)。第1期入学生は札幌農学校の前身校開拓使仮学校・札幌学校から進学した「進学組」13名と、クラーク等が東京英語学校・開成学校（現在の東京大学）からスカウトしてきた「スカウト組」11名であった。

後に北海道庁の初代水産課長を務めるなど北海道水産界をリードした伊藤一隆（1859-1929年）は「進学組」であった (No II - 1)。その父親平野彌十郎（1823-1889年）は土木請負人として開拓使の北海道道路開削事業などに携わり、大きな功績を残した。回想記「平野彌十郎日記」は札幌周辺の開発の様子を記録している (No II - 2)。

大島正健（1859-1938年）は「スカウト組」であった (No II - 3、II - 4)。大島はクラークに思想・信仰の影響を最も受けた教え子で、札幌農学校卒業生を中心に結成した札幌独立基督教会の指導的立場を担った。晩年にはクラークの伝記『クラーク先生とその弟子たち』を出版し、“Boys, be ambitious” の言葉を後世に伝える役割を果たした。

大島と同じく「スカウト組」であった佐藤昌介は第1期生のリーダーといった存在であった (No II - 5)。卒業後にアメリカ留学を経て農学校教授となり、農業経済学を講じた (No II - 6、II - 12、II - 13)。1894年から1930年まで札幌農学校長・東北帝国大学農科大学学長・北海道帝国大学総長を務め、40年にわたって北大を牽引し続けた (II - 14)。

当時の札幌農学校の校舎は、現在の札幌中心地、北1～2条西1～2丁目にあった (II - 8)。現在の札幌市時計台は札幌農学校演武場（1878年建設）に当たり、現在残る唯一の初期札幌農学校の校舎建物である。第2代教頭ウィリアム・ホイラー（1851-1932年）がマサチューセッツ農科大学の“Drill Hall”を参考にラフスケッチ図面を作成した (II - 9)。1階には標本室や研究室があり、2階は儀式・講演会や教練を行なう多目的ホールであった (II - 10、II - 11)。

Ⅲ. 札幌農学校の俊英、第2期生

1877年に入学した第2期生には、大学予備門・工部大学校予科（現在の東京大学）などからスカウトした俊英が集った (Ⅲ - 6)。卒業後、キャリアの初期に札幌農学校教授を務めた新渡戸稲造（1862-1933年）は、その後、教育者、技師、文筆家として名を馳せ、国際連盟事務次長などとして国際政治の分野でも活躍した、近代日本を代表する知識人・国際人である (Ⅲ - 1、Ⅲ - 7)。札幌農学校在学中に水産学を専攻し、卒業後も短期間ではあったが北海道の水産調査に携わった内村鑑三（1861-1930年）は、北海道を離れた後、在野のキリスト教思想家として知識人層に大きな影響を与えた (Ⅲ - 2、Ⅲ - 3、Ⅲ - 7)。

宮部金吾（1860-1951年）は、卒業し留学から帰国後、一貫して教授として植物学を研究して高い評価を受けた。アーサー・グレイ（1810-1888年）、カール・ヨハン・マキシモ

ヴィッチ (1827-1891年)、牧野富太郎 (1862-1957年) など国内外の著名な研究者とも幅広く交流を続け、多くの後進も育成した (Ⅲ-4、Ⅲ-5)。

この他、住友会社で樟脳製造に業績のあった高木玉太郎 (1862-1916年)、第2代総長を務めた南鷹次郎 (1859-1936年)、小樽築港建設を担当した技師廣井勇 (1862-1928年) も第2期生であった (Ⅲ-8)。

Ⅳ．初期札幌農学校の教育

札幌農学校は北海道「開拓」に資する人材養成を目的とした学校であったため、特に農学・園芸学については学理・実習共に重視するカリキュラムを組んだ (Ⅳ-1)。生徒は学理として外国人教師から最先端の科学の教授を受け、実習として附属農場で農作業を実地に学んだ。

特徴的であったのは、「能弁学」(弁論術)と「兵学」(教練)である。クラークの勧めで弁論技術向上のため学生は「開識社」を開催し、英語・日本語で Speech (演説)、Discussion (討論)、Debate (対論) を行なった。「開識社」の開催は、校内に先輩・後輩を問わない活発な議論の雰囲気醸成した (Ⅳ-2)。第4期生志賀重昂 (1863-1927年) の日記が示すように、卒業生は卒業式に、英語・日本語で自身の専攻テーマについて演説も行なった (Ⅳ-3)。1888年卒業の第7期生以降は、卒業論文を提出するようになった。当初は英文論文が大半を占めた (Ⅳ-7)。

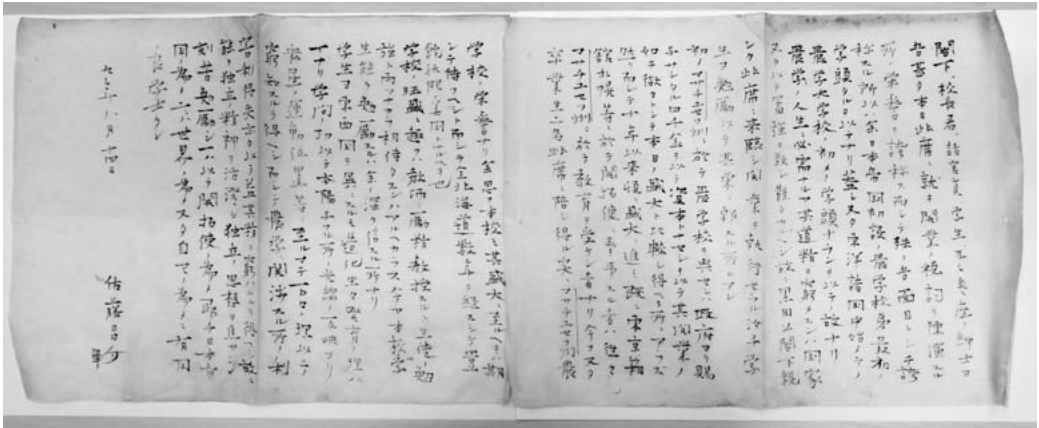
一方、「兵学」(Military Drill)は、マサチューセッツ農科大学のカリキュラムを参考に、第2代教頭ホイラーが強く要望して実施した。座学と実技による兵式教練であった (Ⅳ-4、Ⅳ-5)。

また、札幌農学校で学び研究した内容を北海道の移住民・農民に還元する活動も行なった。研究・調査の結果を冊子にまとめて近隣農家に配布したほか、農業技術指導を行なうこともあった (Ⅳ-6)。

こうした初期札幌農学校の教育は、札幌農学校が幅広い分野で活躍する人材を輩出し、独自の学風を形成する一素因であったと言える。

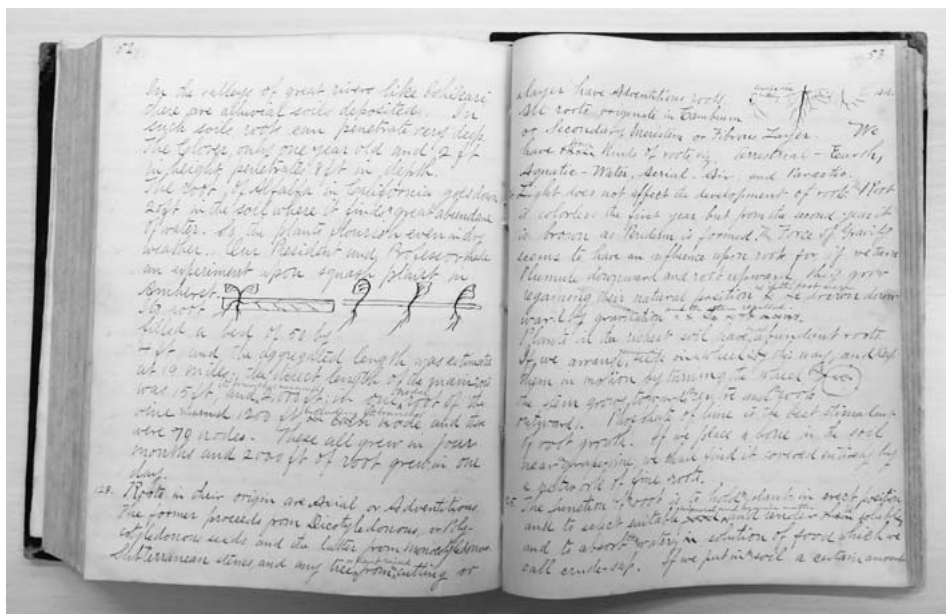


3. 陳列資料目録

I. W. S. クラークと札幌農学校開校	
I-1	W. S. クラーク
高岡熊雄関係資料（写真）	
	
I-2	W. S. クラーク教頭の開校式演説（佐藤昌介訳、1876年8月14日）
札幌農学校簿書No047-5	
1876年8月14日、札幌農学校開業式にあたり、教頭W. S. クラークが演説を行ない、“Lofty Ambition”（高邁な志）という語を用いて第1期入学生に対して向上心に満ちた挑戦を促した。資料は、クラークの英語演説を聞いた第1期生佐藤昌介がその内容を日本語訳した原稿である。	
	

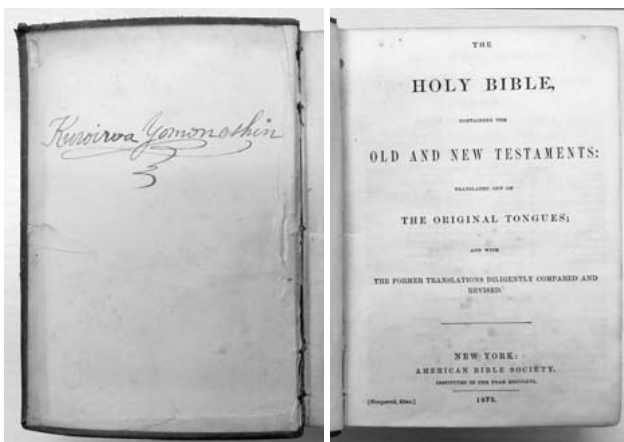
I - 3	W. S. クラーク『植物学』講義を記録した受講ノート (1876年)
受講ノート No0001	

クラークの講義を記録した第1期生佐藤昌介の受講ノート。“Lectures on Structural and Physiological Botany” (植物組織学・植物生理学)。



I - 4	W. S. クラークが第1期生 (黒岩四方之進、佐藤昌介) に与えた聖書 沿革資料 (刊行物)
-------	--

クラークは札幌農学校が開校すると、第1期生にそれぞれの名前を記した聖書を配り、課外に聖書の講義を行なった。“Kuroiwa Yomonoshin” の記名が見られる。布教を目的としたものではなく、倫理教育を目的としたが、第1期生は大きな感化を受け、後に受洗した。



I - 5

W. S. クラーク離任時の札幌農学校の日誌

札幌農学校簿書No050

クラークが札幌農学校を離任する1877年4月16日の学校日誌の記事。生徒一同が島松まで見送ったことを記録している。島松で別れる際、クラークは生徒たちに向けて“Boys, be ambitious”の言葉を残したと、第1期生大島正健が回想している。



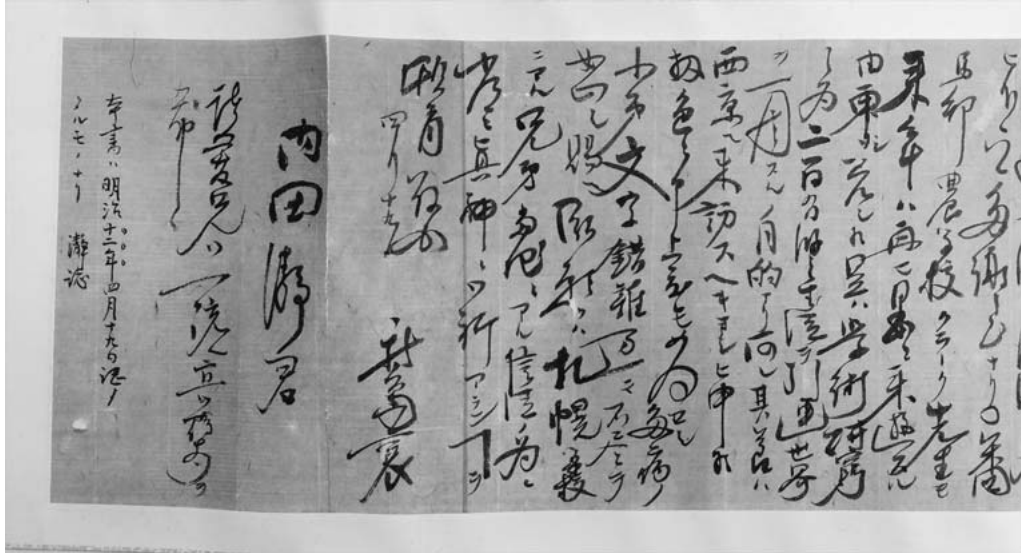
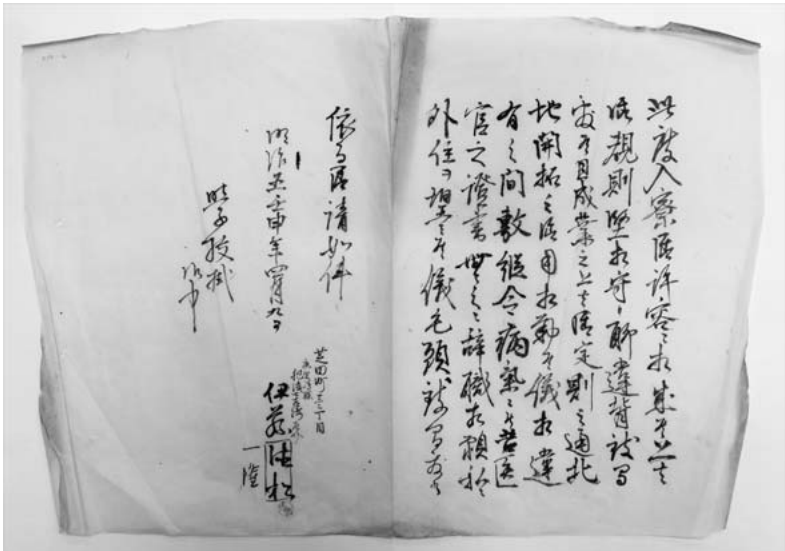
I - 6

島松のクラーク奨学碑の前にて（1956年）

百年史編纂写真No1772

クラーク離別の地である島松には、1951年、“Boys, be ambitious”を刻んだ石碑を建てた。写真は、杉野目晴貞学長とクラークⅡ世夫妻。



I - 7	内田澹宛て新島襄書簡 (1879年 4 月19日)
沿革資料 (軸装・書簡)	
クラークがアメリカに帰国して2年後、新島襄が第1期生内田澹に宛てた書簡。アメリカで帰国後のクラークに会った新島は、クラークが近々、日本に行く予定だと言っていた、と内田に伝えている。しかし、クラークが再来日することはなかった。	
	
II. W. S. クラークの教え子、第1期生	
II - 1	伊藤一隆の開拓使仮学校入校誓書 (1872年 5 月／明治 5 年 4 月)
札幌農学校簿書No010- 2	
開拓使は、1872年 5 月に東京の芝の増上寺に開拓使仮学校を開校し、札幌移転を経て、札幌農学校に改組する。札幌農学校に第1期生として入学した24名の内、伊藤一隆ら13名が前身校からの「内部進学組」であった。伊藤は卒業後、北海道の水産業振興に大きく寄与した。	
	

II-2

「平野父翁昔日語」(平野彌十郎日記)

平野彌十郎関係資料No0001

伊藤一隆の実父平野彌十郎は、江戸で土木請負業をはじめ、維新後、札幌の都市開発に従事し、目覚ましい貢献をした。平野の日記は開発草創期の札幌の様子を記録した貴重な資料である。

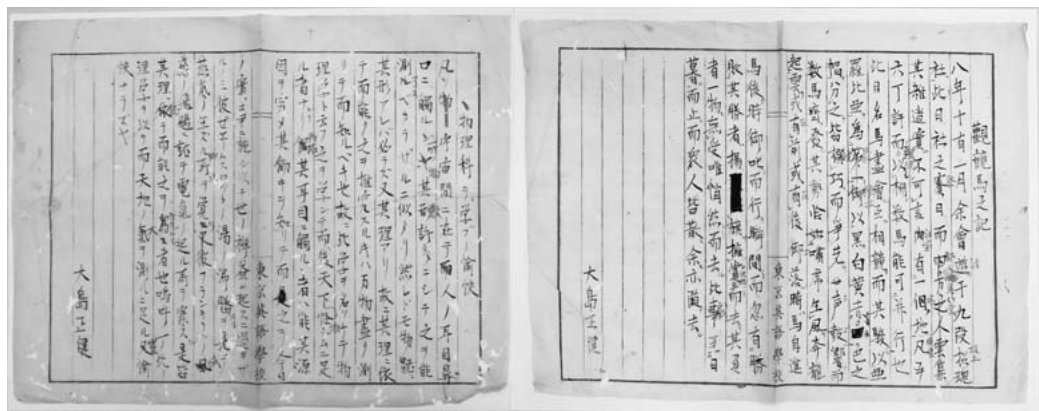


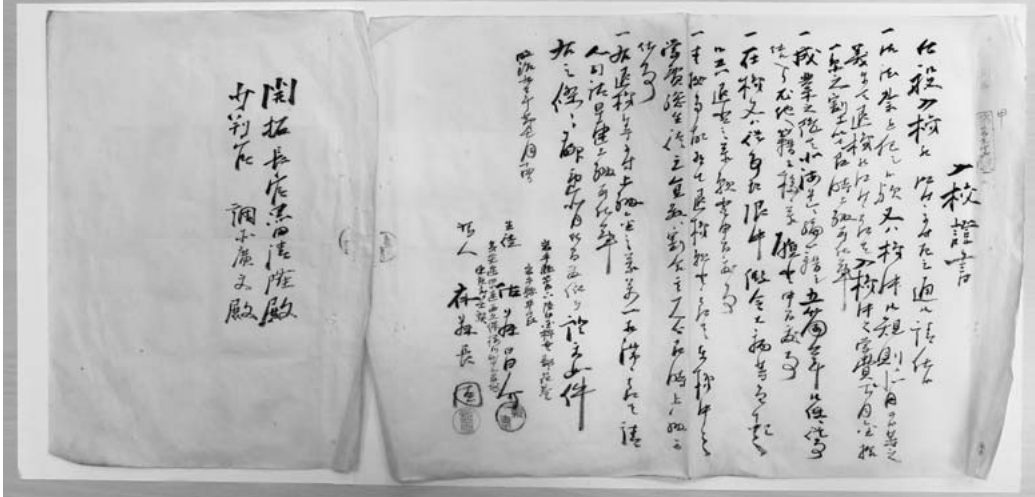
II-3

大島正健の東京英語学校時代の作文 (1875年頃)

大島正健関係資料No0002

札幌農学校は開校に際し、精鋭のエリートが在学していた東京英語学校・開成学校（共に後の東京大学）で生徒をスカウトし、クラークが直接面接した。大島正健・佐藤昌介・黒岩四方之進ら「スカウト組」11名が第1期生として入学した。



Ⅱ - 4	大島正義宛て大島正健書簡 (1876年11月26日)
	大島正健関係資料No0025
	札幌農学校開校から3ヶ月後に第1期生大島正健が実兄に宛てた手紙。クラークが博学であり様々な金言名句を授けてくれること、クラークの高説により黒田清隆開拓長官が禁止していたキリスト教を黙認するようになったことなどを記している。
	
Ⅱ - 5	佐藤昌介の札幌農学校入校証書 (1876年 7月14日)
	札幌農学校簿書No047- 7
	初期の札幌農学校では、在学中の官費支給に対して、卒業後5年間、北海道「開拓」に従事する規定となっていた。盛岡藩士の家に生まれた佐藤昌介は「スカウト組」として入学、年長で成績優秀であったため、第1期生のリーダー格となった。
	

II-6

鈴木大亮宛て佐藤昌介書簡（1883年5月31日）

沿革資料（書簡）

佐藤昌介が農学校卒業後のアメリカ留学中、留学をサポートしていた農商務省官員鈴木大亮に宛てた書簡。ワシントンで元開拓使顧問のH. ケプロンを訪問したときの様子も書き記している。

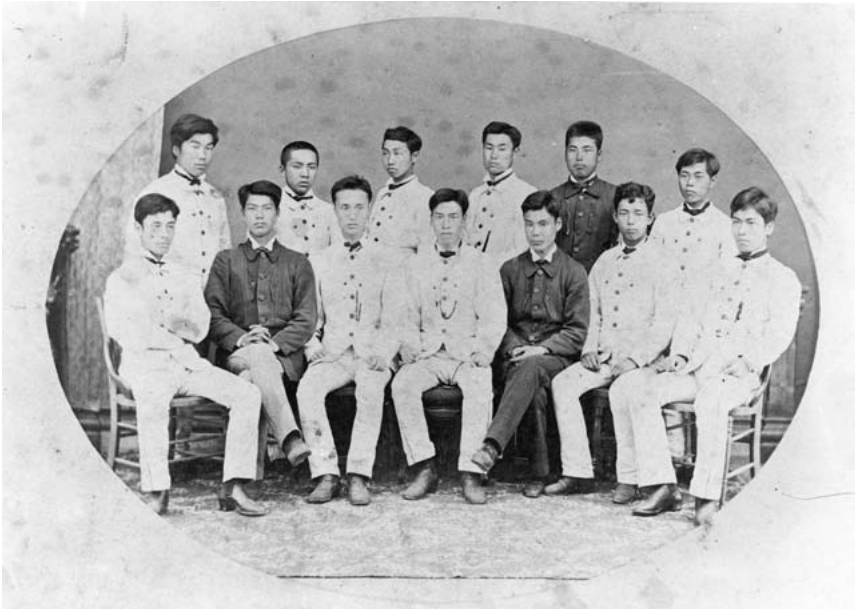


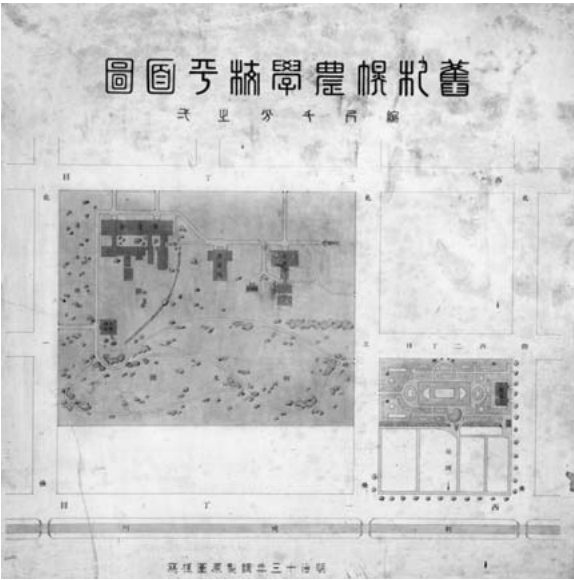
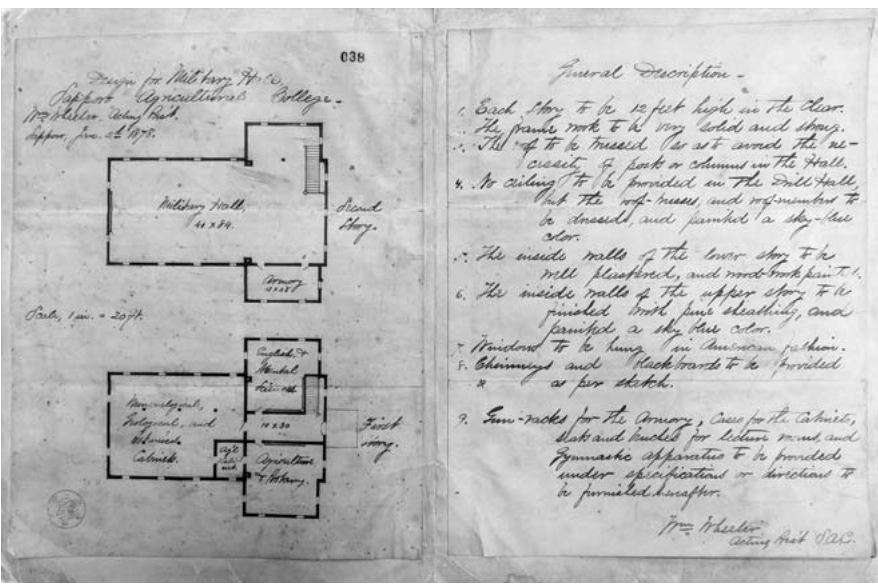
II-7

札幌農学校第1期生（1880年頃）

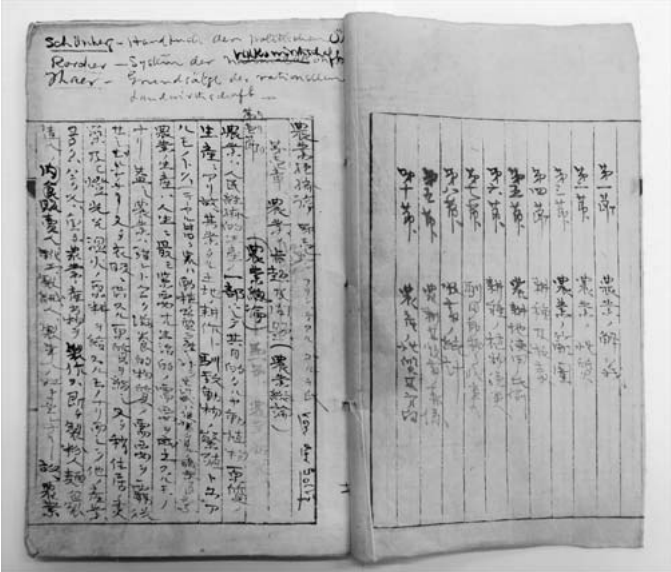
大島正健関係資料No0118

後列左より、佐藤勇、大島正健、中島信之、柳本通義、田内捨六、小野兼基
前列左より、荒川重秀、黒岩四方之進、佐藤昌介、渡瀬寅次郎、内田澗、伊藤一隆、出田晴太郎



II-8	札幌農学校平面図 (1880年)
沿革資料 (額装・平面図)	
最初の札幌農学校のキャンパスは現在の北1～2条西1～2丁目であった。1903年に附属農場であった現キャンパスに移転した。最初のキャンパスの建物では演武場 (現札幌時計台) が残るのみである。	
	
II-9	W. ホイラーの演武場ラフスケッチ図面 (1878年 1月 2日)
沿革資料 (書簡)	
クラークの後任の教頭に就任したW. ホイラーによる演武場のラフスケッチ図面。マサチューセッツ農科大学の Drill Hall に倣って設計し、1879年に完成した。1階は標本室や研究室、2階は軍事教練 (Military Drill) や儀式、講演会などを実施する多目的ホールであった。	
	

Ⅱ－10	「演武場」扁額（岩倉具視筆）
	沿革資料（扁額・墨蹟）
	札幌農学校演武場の正面に掲げるため、明治政府の要路、右大臣岩倉具視（1825-1883年）が揮毫した「演武場」扁額。演武場は、1903年、札幌農学校のキャンパス移転に伴って札幌区に売却され、現在は札幌市時計台として親しまれている。
	
Ⅱ－11	札幌農学校演武場（1889年頃）
	沿革写真No100-029
	

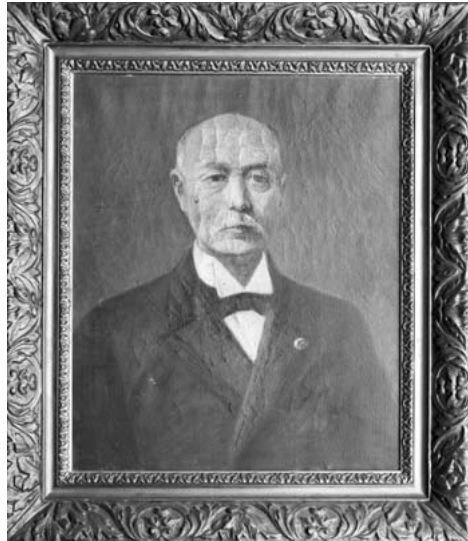
II-12	佐藤昌介「農業経済学講義 第巻 農業汎論」(1888年 1月)
中島九郎関係資料No2014-0003	
佐藤昌介は、卒業後、アメリカ留学などを経て、札幌農学校教授となった。資料は教授就任2年目1888年の農業経済学の自筆講義ノートである。佐藤は、1891年には日本で初めて「植民学」の講義を行なった。	
	
II-13	佐藤昌介校長と農業経済学教室の人びと (1898年 7月)
高岡熊雄関係資料 (写真)	
佐藤昌介校長・教授 (前列左端)、高岡熊雄助教授 (前列右端)、農業経済学専攻の学生たち (第16、17期生)。	
	

Ⅱ－14

佐藤昌介肖像画（有島生馬作、1912年）

佐藤ユリ氏寄贈（額装・油彩画）

佐藤昌介は1891年に校長心得に就任して以降、校長・学長・総長として40年以上に渡って北大を牽引し続けた。肖像画作者の有島生馬（本名：有島壬生馬、1882-1974年）は白樺派を代表する画家。生馬の実兄、作家の有島武郎は、札幌農学校卒業生（第19期生、農業経済学専攻）で、卒業後教壇にも立ち、佐藤の教え子であった。



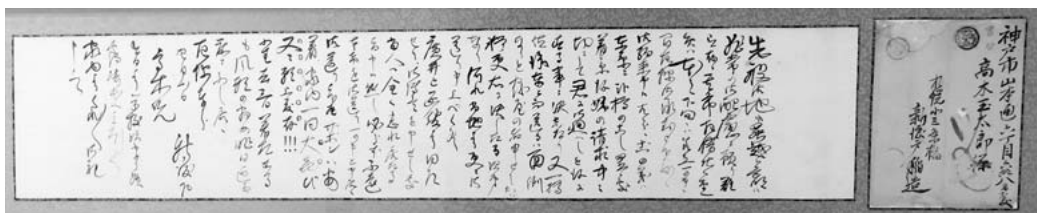
Ⅲ．札幌農学校の俊英、第2期生

Ⅲ－1

高木玉太郎宛て新渡戸稲造書簡（1897年4月1日）

吉村晃子氏寄贈（額装・書簡）

札幌農学校教授となっていた新渡戸稲造（1862-1933年）が、同期生高木玉太郎（1862-1916年）に宛てた書簡。高木は住友会社に入社し、別子銅山や樟脳事業の技師をしていた。卒業後15年以上を経ても、同期生同志で借金をしたり、鰯（はららご、魚卵）やザボンや鮭の遣り取りをしている。



Ⅲ-2 高木玉太郎宛て内村鑑三書簡 (1892年9月11日、10月7日)

高木康子氏寄贈 (額装・書簡)

同期生同士が卒業後も英語で書簡を遣り取りしている。「内村鑑三不敬事件」(1891年)後、大阪の泰西学館で教員をしていた内村が高木に宛てた書簡。泰西学館で地理学、歴史学、J.ミルトン『失楽園』、天文学を週20時間講義していた状況、生活困窮、仕事への不満などを書き送っている。

Ⅲ-3 内村鑑三「日本魚類目録」(1883-1884年)

大島智夫氏寄贈 (ノート・書簡)

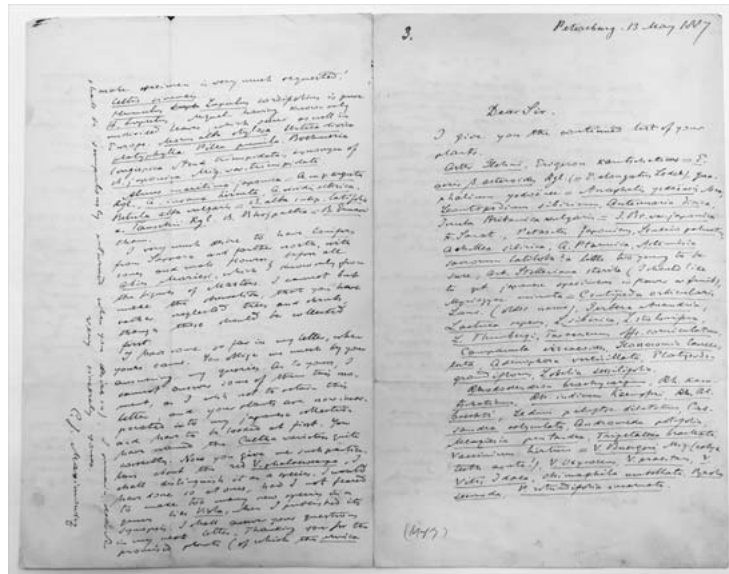
第2期生内村鑑三(1861-1930年)の札幌農学校における研究テーマは「漁業」であった。第1期生伊藤一隆と共に内村は水産学を専攻した最初期の日本人の一人であった。

Ⅲ-4

宮部金吾宛てC. J. マキシモヴィッチ書簡 (1887年5月13日)

宮部金吾宛て外国人書簡NoM-17

第2期生宮部金吾は卒業後、植物学の教授となった。世界中の著名植物学者や植物園と標本の交換、研究交流を行なった。C. J. マキシモヴィッチはロシア生まれのドイツ人植物学者。幕末・維新时期アジア極東地域の植物を研究し、日本人植物学者に大きな影響を与えた。

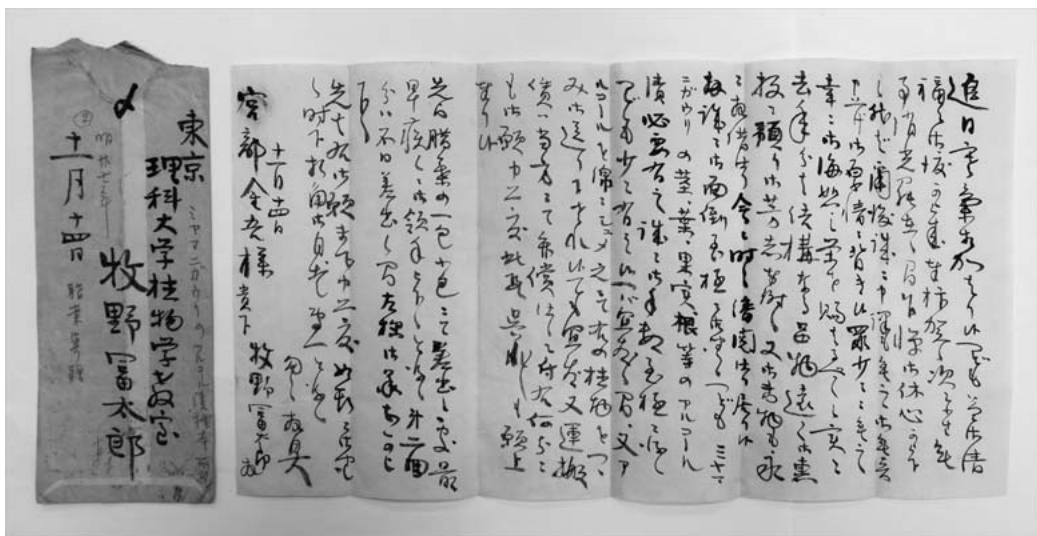


Ⅲ-5

宮部金吾宛て牧野富太郎書簡 (1894年11月14日)

宮部金吾宛て書簡No牧野富太郎002

牧野富太郎は近代日本を代表する植物分類学者。東大の植物学研究室に出入りしていたが、一癖ある人物であったため周囲との軋轢も多かった。宮部とは晩年まで親交が続く。書簡には研究室の教授を非難する内容も。



Ⅲ－6	卒業を前にした札幌農学校第2期生 (1881年7月)
	沿革写真No100-050
	後列左より、足立元太郎、新渡戸稲造、内村鑑三、鶴崎籾一 (第3期生として卒業)、藤田九三郎、南鷹次郎、廣井勇、岩崎行親。前列左より、町村金彌、諏訪鹿三 (第3期生として卒業)、アメリカ人教師 (C. H. ピーボディ、W. P. ブルックス、J. C. カッター)、宮部金吾、高木玉太郎。
	
Ⅲ－7	文化人切手に描かれた内村鑑三と新渡戸稲造 (1951-1952年)
	高尾彰一関係資料 (郵便資料)
	「文化人切手」発行当日の日付印 (消印) が押された「初日カバー (First Day of Issue)」。1951年から発行された「文化人切手」には18人の日本人が描かれ、札幌農学校出身者からは第2期生の2名 (内村鑑三、新渡戸稲造) が選ばれた。
	

Ⅲ－８

南鷹次郎胸像

沿革資料（木製台座・石膏）

南鷹次郎（1859-1936年）は第2期生として札幌農学校に入学した。卒業後、農学校の教授（農学）となり、佐藤昌介の片腕として農場の経営に当たった。農学校の大学昇格後は、農学部長（1919-1927年）、佐藤の後任として第2代総長（1930-1933年）を歴任した。



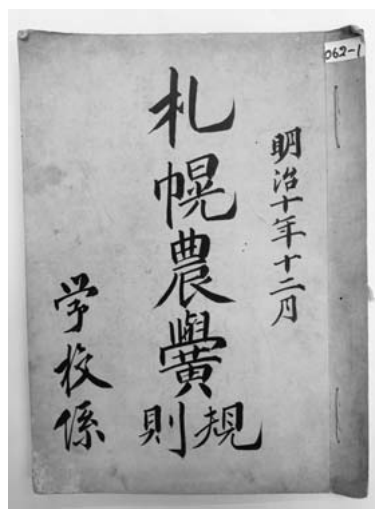
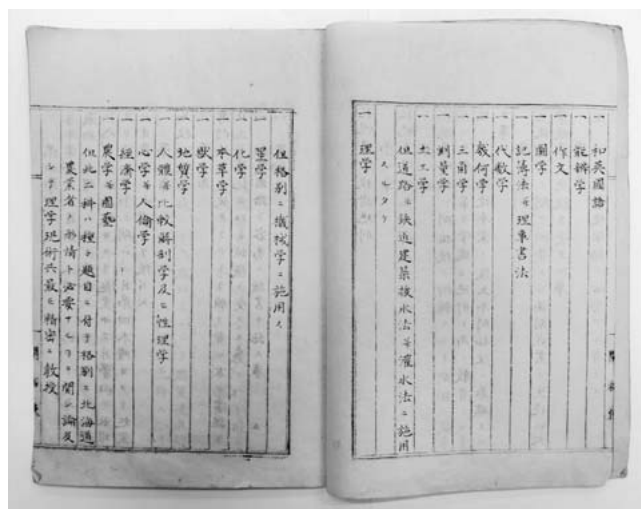
Ⅳ．初期札幌農学校の教育

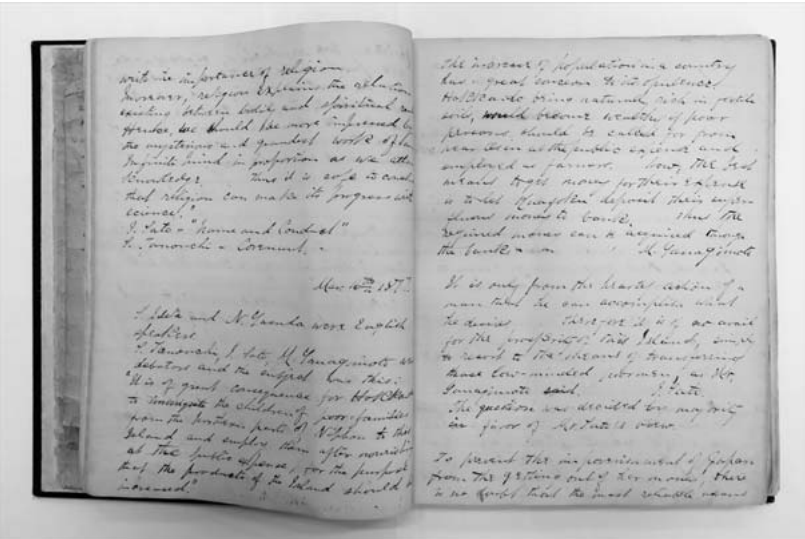
Ⅳ－１

「札幌農学校諸規則」（1876年9月）

札幌農学校簿書No062-1

札幌農学校開校後、クラークの承認を得て1876年9月に制定した。「開拓ニ従事スベキ青年輩」のための学校であること、「卒業ノ後五年開拓使ニ奉職スベキ」と定めている。カリキュラムでは、「農学」「園芸」を学理・技術の両面で重視していること、「能弁学」（弁論術）などが特徴的。



IV-2	「開識社記録 一」(1876-1881年)
	沿革資料(ノート)
	W. S. クラークの提案で第1期生は弁論集会「開識社」を結成した。1877年3月16日には「北海道の生産増大のためには、東北地方の貧家の子弟を移住させ、官費で教育を受けさせて、雇用する策が重要である」という論題でディベートを行ない、柳本通義は賛成論、田内捨六は反対論を主張した。 

IV-3	志賀重昂「札幌農学校第貳年期中日記」(1881-1884年)
	沿革資料(和装綴・日誌)
	第4期生志賀重昂(1863-1927年)の札幌農学校在学中の日記。志賀は農学校のキリスト教的雰囲気反発的で、第2期生内村とは論敵であったが、第2期生卒業式での内村の演説について日記に感涙に堪えなかったと記している。志賀は後に国粋主義を標榜する政教社に参画し、雑誌『日本人』の同人となった。 

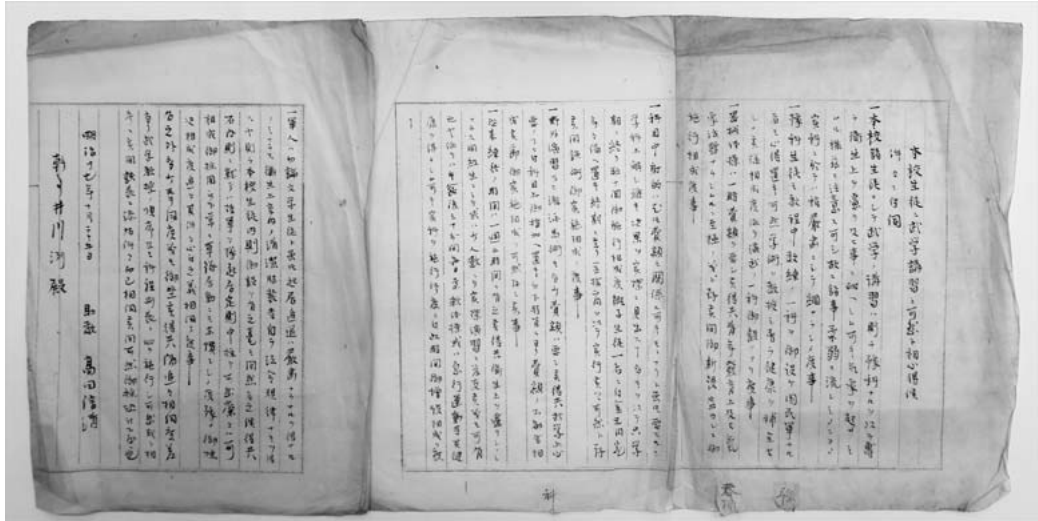
IV-4

高田信清「本校生徒ニ武学講習シ可然ト相心得候件々ニ付伺」

(1884年10月25日)

札幌農学校簿書No206-4

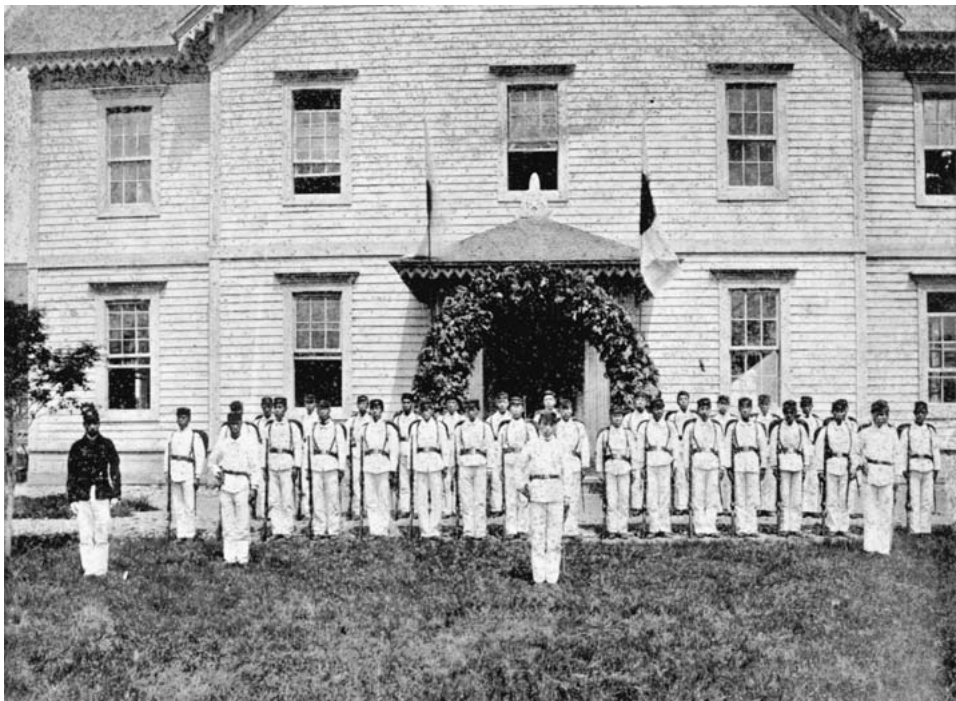
教頭W.ホイラーは当初からカリキュラムにあった「兵学」(Military Drill)の実施を強く要請し、1878年12月から開講した。2人目の「兵学」教師の高田信清(退役した陸軍大尉)は、「兵学」について、生徒の健康増進への配慮、厳格な実技などを意見している。



IV-5

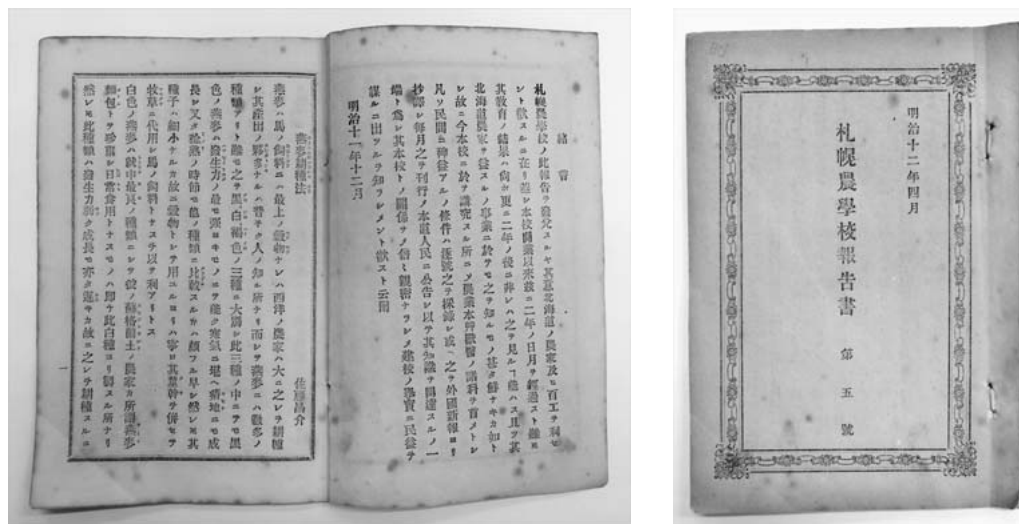
軍装の第7・8期生(1888年、演武場前にて)

沿革写真No100-060



IV-6 『札幌農学校報告書』第5号 (1879年4月) 沿革資料 (刊行物)

北海道の農家への啓蒙と情報提供を目的に『札幌農学校報告書』を刊行した。「燕麦耕種法」(佐藤昌介)、「菊を害する虫を駆り除く良法」(岩崎行親)、「樹木移植論」(D. P. ペンハロー)など。



IV-7 第7期生石川貞治の卒業論文 (1888年) 沿革資料 (卒業論文Na0001)

札幌農学校では第7期生から卒業論文作成を行なうようになった。石川貞治 (1864-1932年) は地質学・測量学を専攻した。卒業論文は“On Some Scientific and Economic Points of the Geology of Hokkaido” (「北海道地質学における科学的及び実用的な特徴」)。

